



せん げん やま 浅間山

可児市立東可児中学校
令和5年10月24日発行

「さりげない優しさ」

教務主任 桑下正之

金木犀のふんわりとした甘い香りが漂い始めました。本校の中庭には大きな金木犀の木があり、小さなオレンジの花をたくさん咲かせています。花やその香りから、秋が深まってきたことを感じます。どの学級、学年も前期に培った文化や財産を基にして、後期のスタートを上手くきることができています。

1年生の国語では「星の花(銀木犀)が降るころに」という教材で授業を行いました。主人公の「私」は、小学校時代に仲の良かった「夏実」とちょっとしたことからすれ違いになり、友だちとの関係が続いていくことが難しくなっていきます。何とか以前のように仲直りを試みますが、上手くはいきません。そんな様子の一部始終を見ていた幼馴染みの「戸部君」が主人公の「私」に手を差し伸べます。「戸部君」



は、はっきりと「こうしよう」とか「こんなふうにしたらいいよ」という直接的なアドバイスはありません。ただ、塾から出された宿題の“あたかも”という言葉を使って考えた例文、「おまえは、俺を意外とハンサムだと思ったことが—あたかももしれない。」と、自分なりに考えて、「私」に話しただけなのです。その言葉を聞き、主人公の「私」は笑顔になりながらも、うっすらと涙を浮かべます。友だちとの現状が苦しかった主人公の「私」にとって、「戸部君」の言葉やその行為は、何よりも温かいものだったのでないでしょうか。最後の場面では、主人公の「私」は、新たな決意をして、一歩を踏み出します。主人公は、みんなと同じ中学生です。日常生活の中で上手くいくこともあれば、上手くいかないことも多々あります。全てが経験、糧であり、自分の成長に繋がっていると感じます。誰かの一言で、誰かの行為で、救われる人がたくさんいます。自分たちの周りで困っている仲間や先輩、後輩を見かけたら、自然と声をかけることができる存在でありたいですね。

授業の中で、自信がもてなくて発表できない仲間がいた時、近くの仲間が声をかけ、支える姿がみられます。部活動中に荷物を運ぼうとした私に、声をかけてくれた2年生の市原彩さん、横井寧々さん。掃除をしているときに、爽やかな声で、「先生、手伝うことないですか」と声をかけてくれた1年生の杉浦友愛さん、大西良翼さん、幾度主莉さん、友成風雅さん。後期になっても、その「優しさの行為」は仲間に連鎖し、同学年の伊藤暖さん、宮口陽向さんが引き継いで、一緒に掃除をしてくれています。



笑顔の“もと”

後期始業式に学校長が「行為の意味」の話の中で、『「こころ」はだれにも見えないけれど、「こころづかい」は見える』という言葉を紹介されました。行為一つ一つには大きな意味があります。皆さんのさりげない優しさ、こころづかいが多くの人を助け、支えています。

みんなの行為が学校の生活環境を整え、東可児中の生徒そして職員、多くの方が、笑顔で安心して過ごすことのできる空間となっています。ぜひ、これからも「行為の意味」を大切にして様々な活動に取り組んでいくことを期待しています。



東可児中
ポータルサイト